

～患者団体向けインフォメーション・セッションを開催～
＜実践的なスキルアップを図ることに主眼を置き、『ディベート』のワークショップを実施＞
日本ディベート協会専務理事・立教大学経営学部教授の松本 茂氏を招聘し、
グループワーク形式で活発に議論

日時:2013 年 4 月 19 日(金曜日)

場所:TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター4 階カンファレンスルーム 4B

PhRMAは、日本の患者の方々への支援活動の一環として、去る2013年4月19日(金)、関東近郊の患者団体の代表者の方々等を対象に、本年初めての「インフォメーション・セッション」を開催しました。今回は、初めての試みとして、参加者全員を対象としたワークショップを実施。『ディベート』をテーマに、専門家による講義と、グループワーク・トレーニングの二部構成で、開催されました。

2011 年以降、PhRMAでは、インフォメーション・セッションを通じて、患者団体参加者の方々へ、他国の医療制度や保健制度の実情、そして日本の患者団体による医療政策に関する提言・参画事例等の情報を提供してきました。今回は、患者団体の方々が関係各所との折衝活動や、メディアとのやり取りをする上で今後重要性が高まるとされる「議論力」の向上をめざし、『ディベート』をテーマに、実践的なスキルアップを図りました。第三者に分かりやすく、筋道立った説明ができるような「説得力」「論理性」を向上させるための機会を提供しました。

前半では、まず、日本ディベート協会専務理事であり、立教大学経営学部国際経営学科教授である松本 茂氏に、ディベートの定義、目的、特徴、進め方等について講演していただきました。

その後、講義で学んだ内容を受け、後半のグループワークに備え、「日本は、乳幼児へのおたふく風邪の予防接種を義務化すべきである。是か非か」という論題について、肯定側4組と否定側4組の8チームに分かれ、主催者側が用意した情報・資料をもとに、事前の準備にあたりました。

そして後半のグループワークでは、松本氏のアドバイスを受けながら、実際にディベートを行ってもらいました。参加者は交代で、ディベートをするだけでなく、他グループ同士のディベートを聞き、肯定側・否定側のどちらが「優れていたか」を審査することも体験しました。

ディベートでは、各グループの人数を少人数に設定したこともあり、全ての参加者に発言の機会が与えられました。相手側の意見をしっかり聞き取り、限られた時間内で発言内容を論理的に組み立てることを全員が体験。ほとんどの参加者にとってディベートは初めての体験だったため、当初は多少の戸惑いは見られましたが、議論は概ね活発であり、客観的な根拠に基づいて行われました。休憩時間には、疲れたとの声が多数あり、限られた時間で集中してディベートを行った様子が伺えました。

松本氏からは、総評として、「相手を単に否定するのだけではなく、相手の意見のある程度受け入れたうえで、反対意見を述べていた参加者が多数いらしたことがすばらしかった。相手と共有できる価値観を強調し、お互いに敬意を持って、議論することが大切」、「主張したいことを、まずは簡潔な短い文で言えば、メッセージが伝わりやすくなる」とのアドバイスがありました。

また、ディベート・トレーニングの後には、普段はあまり顔を合わせることがない、疾病領域が異なる患者団体同士の交流の場として「ネットワーキング」の時間を設け、自由にコミュニケーション・情報交換を行ってもらいまし

た。リラックスしたムードで、活発な交流の様子が伺えました。

今回は、17団体28名の患者団体の方々が参加。「講義の後に、実際にトレーニングをすることによって、よりディベートについての理解が深まり大変よかった」、「良い意見を持っても論理的でなければ相手を説得できない。どうしたら論理的に話せるのかがわかった」などの声が寄せられた。また、「患者会活動をする上で、どのようにディベートのノウハウを活かしていけるのか、参考になった」、「職場、人材育成、患者会の例会で活用し、トレーニングしたい」など、それぞれにとって、今後の具体的なアクションにつながるコメントが数多く見られました。

<セッション風景>

講義風景



松本茂氏



グループワーク風景



ディベート・トレーニング風景



ネットワーキング風景

